

1960年代ウルグアイにおける ラテンアメリカ文学の受容

浜 田 和 範

はじめに

20世紀の初めから中頃にかけて経済的繁栄と社会的安定を誇ったウルグアイは、朝鮮戦争後の不況に端を発する経済危機が長期化し、1960年代に政治経済面での危機が進行した。1952年より大統領制に取って代わったコレヒアード（複数行政代表制）のもと、政府は迅速かつ抜本的な政策を打ち出せず、1958年の選挙では93年ぶりの政権交代が起こり、1966年にはコレヒアードそのものが廃止されて大統領制が復活する。この間、トゥパマロス国民解放運動（Movimiento de Liberación Nacional - Tupamaros）に代表される都市ゲリラの活動が激化し、政府は強権を振るって徐々に民主主義を掘り崩していく。「アメリカ大陸のスイス」（la Suiza de América）の呼称にも示されるラテンアメリカの例外的存在という自己認識が崩れゆく中、キューバ革命に代表される国外の政治動乱に刺激される形で、ウルグアイもまた〈政治の季節〉を迎えることとなる。

かような状況下、1960年代のウルグアイでは「出版ブーム」とも呼ばれる現象が見られた。劇作家・批評家であったカルロス・マッジの調べによれば、1959年から1967年にかけての概算で、ウルグアイ国内における書籍発行点数は100タイトルから200タイトル、販売部数に至っては50,000部から500,000部へと大きく飛躍した（Maggi 1968: 40-41）。

この出版ブームを支えたのは、基本的には国内著作家の出版物である。本稿でも後述する文化誌『テーマス（主題）』（*Temas*, 1965-1968）の創刊号において編集次長ウゴ・ガルシア・ロブレスは、アルゼンチンとウルグアイの書籍市場を比較し、アルゼンチンの書籍市場の95%は翻訳ものであるのに対し、ウル

グアイの書籍市場の 99% はウルグアイの作家によって占められていると述べた (Robles 1965: 59)。にわかには信じがたい数字ながら、1960 年前後より国内作家による出版活動が活況を呈したことは間違いない。

他方、ウルグアイがアメリカ大陸の例外的存在であり続けたという自覚を持つ知識人たちの間では、アメリカ大陸 (América)¹⁾の現実を目を向けることを促す論調が興隆したことも確かである。現在でこそ広く使われる「ラテンアメリカ」(América Latina/Latinoamérica) という呼称は、1960 年前後においてはまったく一般的なものではなかった。アングロアメリカを含まない米州諸国を想定するとき、スペイン語圏で使われる語彙は「イスパノアメリカ」(Hispanoamérica)、「アメリカ大陸」(América) であることが常だった。キューバ革命を契機としてそれまでとは異なる統一体を構想するべく召喚された「ラテンアメリカ」の語に、実体を与えること。特にこの旗振り役となったのは、「45 年世代」(la Generación del 45) あるいは「批判の世代」(la Generación Crítica) と呼ばれる一連の知識人・作家たちだった。1960 年代にラテンアメリカはおろか世界中を駆け回り、ラテンアメリカ文学の喧伝と批評に携わった彼らは、当然のことながら自国内においても、表裏両面にわたってラテンアメリカ文学の創出と興隆に貢献した。

この過程は、無論、一枚岩的なものではない。個人的関係や文化的嗜好が東西冷戦という磁場に大きく翻弄され、1963 年の当時でも 260 万人に満たないこの小国では激しい文化的冷戦が繰り広げられたのである。その過程の中で、「ラテンアメリカ文学」をめぐるいかなる達成がなされたのか。本稿では、彼らが関わった定期刊行物や関連記事を中心に参照することで、ウルグアイにおけるラテンアメリカ文学受容の特質を明らかにする。

『マルチャ』と『エル・パイス』

アメリカ大陸全土への注目を呼びかける声としていち早く注目されたのは、詩人マリオ・ベネデッティが 1960 年、週刊紙『マルチャ (行進)』(Marcha) 第 1017 号に発表した論考「アメリカ大陸に背を向けて」である。1939 年、カル

ロス・キハーノによって創刊され、政治面では反帝国主義および第三極を標榜していた『マルチャ』は、特にその文化欄、中でも文芸欄における寄稿記事の質から、国内外に大きな波及力を持っていた。その『マルチャ』に掲載され、大陸の兄弟たちの命運に興味を示さない自国の無気力を批判したベネデッティの論考は大きな反響を呼び、これを収録し同年に刊行された彼の評論集『うしろめたい国』(*El país de la cola de paja*)は、ウルグアイ国内において版を重ねた。とはいえ、これ以降ベネデッティが『マルチャ』文芸欄で存在感を放つことはなかった。直接の原因は、主幹キハーノとの対立である。1958年から同紙文芸欄の編集長を務めていたベネデッティは、自国の政治的変動とキューバ革命に衝撃を受け、政治に関する紙面を増やしてほしいとキハーノに持ちかけるも拒否され、編集長の職を辞したのだった。

その後を継いだのが、文芸批評家アンヘル・ラマにほかならない。ベネデッティとのかねてからの不仲ゆえにか、ラマはその後、ベネデッティの言によれば、一度も彼に寄稿を依頼したことはなかったという²⁾。そのような人間関係も作用して、ラマは自らが率いる文芸欄のスタッフ陣を一から組み直すことになる(Rocca 2015: 197-198)。いずれにせよ、社会学的側面から豊富な例証を添えつつ文学作品を論じるラマは、来るべきラテンアメリカ文学の隆盛を演出するには、格好の人選であった。

文芸欄編集長となったラマがラテンアメリカ文学の紹介において目指したのは、個々の作品を大陸レベルのパースペクティブから捉えてみせることだった。パラグアイの作家アウグスト・ロア・バストスが1960年に刊行した『人の子』を彼がいち早く論じた際(第1016号)、「偉大なアメリカ大陸の小説」(*una gran novela americana*)という形容を与えたことから、このことは明白である。同年の最後を飾る第1041号では、国内文学についての論考「一個の文学の構築」の末尾でキューバ革命に触れ、先のベネデッティの記事にも触れつつ、ヨーロッパ志向のウルグアイ知識人・作家・芸術家の意識を揺さぶった1960年最大の文化的事件として評価する。同じ号にはイスパノアメリカ文学をめぐるカルロス・レアル・デ・アスーアの論考も掲載されている。翌1961年の第1042号では、「アメリカ大陸の文学」(*Letras en América*)と銘打ったコ

ーナーを設けてアルゼンチンとキューバを取り上げ、特にキューバでは文学祭やカサ・デ・ラス・アメリカスの文学賞といった大衆への文化活動を紹介している。そのようにしてラマは、フリオ・コルタサル、ホセ・マリア・アルゲダス、ミゲル・アンヘル・アストゥリアス、カルロス・フエンテス、マリオ・バルガス・ジョサといった作家たちを次々と大々的に取り上げつつ、1962年を締めくくる第1139号に掲載された「これがアメリカ大陸だ」のような記事で、定期的にラテンアメリカ文学の見取図と正典的作家を提示し、自らの「ラテンアメリカ文学発見」(Gómez 2014)にパースペクティブを与えていく³⁾。

1960年前後の国内外の情勢に敏感に反応した彼らに先立ち、1945年頃から1957年の長きにわたり『マルチャ』文芸欄編集長を務めていたのが、ラマの不倶戴天の敵とも言える文芸批評家、エミール・ロドリゲス・モネガルであった。1957年から1960年にかけてのイギリス留学による長い空白期間、さらにそのさなか勃発したキューバ革命に対する編集部との意見対立といった事情から『マルチャ』での居場所を失った彼は、日刊紙『エル・パイス(国)』に根城を移し、編集長としての権限こそないものの、文学、映画、演劇をめぐり旺盛な執筆を行っていた。ラテンアメリカ文学に関しては、フエンテスやビセンテ・レニエロ、ファン・ガルシア・ボンセ、バルガス・ジョサなどの新進作家や、ジョアン・ギマランエス・ローザのようなブラジル作家を紹介している。並行して1961年、主に50年代に発表したラテンアメリカ文学関連の批評文を集成した『こちらのアメリカの語り部たち』(*Narradores de esta América*)をアルファ社より刊行し、マリアノ・アスエラからベネデッティ、オネッティ、さらにはブラジルのジョゼ・リンス・ド・レゴにいたるラテンアメリカ文学の見取図を提示している。

ラテンアメリカ文学の精力的な紹介とその鋭利な批評に生涯を捧げ、作家たちからも惜しめない敬意を払われたラマとロドリゲス・モネガルは、ともに互いを相容れない存在と公言して憚らなかった⁴⁾。若い頃からのごく個人的なレベルでの諍い⁵⁾に端を発したその対立は、時とともに、きわめて鮮明な文学的嗜好のコントラストをまとうものとなった。ビクトリア・オカンポの主導により創刊され、編集陣にホルヘ・ルイス・ボルヘスやアドルフォ・ビオイ・カサ

ーレスなど錚々たるメンバーを揃え絶大な影響力を持った隣国アルゼンチンの文芸誌『スール』に決定的な影響を受けたロドリゲス・モネガルは、英文学への傾倒で知られ、作品の自律性を問う批評活動を行った。それに対し後発のラマはフランス文学を好み、アドルノやベンヤミンといったフランクフルト学派、さらにはアントニオ・カンディド、リュシアン・ゴールドマンといった社会科学的方法論を吸収し、『スール』の看板とも言えるボルヘスを「逃避の文学」として嫌ったのだった。

しかしながら1960年代、その対立を決定的なものにしたのは、両者の政治的立場だった。ロドリゲス・モネガルはキューバ革命に対し、勃発の段階から冷ややかな態度を崩さなかった。他方ラマは1961年、米国によるキューバ封じ込めを狙った「進歩のための同盟」プランが発足しエルネスト・チェ・ゲバラが反対演説を行ったことで知られる、プンタ・デル・エステで開催された米州経済社会理事会閣僚級特別会議に特派員として派遣され、熱心なキューバ擁護の論陣を張っていたのだった。さらに1965年には、キューバの文化機関カサ・デ・ラス・アメリカスの協力委員会にも名を連ねることになる。

かねてからの確執はそのままに、それぞれ場所を得た二人によって、アメリカ大陸の新しい文学は着実に紹介されていった。しかしながら、両者の衝突は時間の問題だった。1964年、それは現実のものとなる。偶然か必然か、直接のきっかけとなったのは、あるキューバの小説であった。

ラマとロドリゲス・モネガルの「論争」——カルベンティエール『光の世紀』をめぐる

キューバの作家アレホ・カルベンティエールの長篇小説『光の世紀』がメキシコのコンパニーア・ヘネラル社より刊行されたのは、1962年のことだった。フランス革命の熱狂がカリブに及ぶ様を描き出すこの小説をめぐる、刊行から2年後、ラマとロドリゲス・モネガルが数度にわたって激しい「論争」を行うのである。

発端は、『マルチャ』第1206号（1964年5月22日）に載ったラマの記事「ア

レホ・カルペンティエールの戴冠」だった。ここでラマは作家のキャリアを詳細に解説しつつ、本文の最後尾で『光の世紀』に触れ、これが「ブルジョワ階級の武勲」であり「失敗した革命の年代記」であると評する。

その2日後ロドリゲス・モネガルが、『エル・パイス』5月24日版に、「不都合な本」と題した書評を寄せた。この論争を分析したパブロ・ロッカ(2004)が指摘するように、発表された日付を比べれば、ロドリゲス・モネガルが自らの記事を執筆する際、ラマの記事を克明に読んだ可能性は低い。かならずしも論争を意図してのものではなかったかもしれないその記事は、しかしながら、ラマとは対極的な視点を打ち出す。ロドリゲス・モネガルによれば、1956年から1958年という執筆時期こそキューバ革命に先行するとはいえ、一切直接言及されていないキューバ革命を『光の世紀』に読み込むことは可能であり、「正統的」な読み方に捕らわれる必要はない。例えば小説内に登場するギロチンはひとつのシンボルであり、それが銃殺用の壁であっても構わない。こうして彼は『光の世紀』を「革命のゆきすぎをめぐる、豊かにして複雑、眩くもあり陰惨でもあるヴィジョン」を暴き出す反革命の書と捉え、それによって作者はフランス革命の暴力をバティスタ政権関係者の処刑と重ね合わせているのだと説く。さらには主人公の一人、当初は卑しい商人であったビクトル・ユーグが、革命の大義によって転向し無数の修羅場をくぐったのち、「ひと山いくらの殺し屋」である独裁者となり果てるという結構は、キューバ革命に対する攻撃であり、だからこそ『光の世紀』はキューバで流通していないのだと論じてみせる⁶⁾。

この書評から数日後、次号の『マルチャ』(第1207号、5月29日)でラマは、おそらくは当初の予定通り、ほぼ1ページ半を費やして『光の世紀』を詳細に論じる。そこでラマは改めて、この小説がブルジョワ革命のグロテスクな側面を抉り出したものであることを詳細に論じてみせる。それに加え、「虚偽商会」と題された同号別記事で、ロドリゲス・モネガルに直接反駁を行う。ここでラマは、やはり『光の世紀』の執筆時期を確認しながらも、そこに描き出されているのが18世紀的ブルジョワ革命であり、現下のキューバ革命とは何の関係もないことを指摘したのち、欧州でもキューバ国内でもロドリゲス・モネガル

のような読み方をする人間はいないとキューバの内情を紹介することで自説を補強する。さらに、キューバ国内での流通をめぐるロドリゲス・モネガルの主張は端的に虚偽であり、そもそも初版の版元であるコンパニア・ヘネラル社は南半球での流通が弱いこと、自分の手元にある版はまさしくハバナのR出版(Ediciones R)より1963年に刊行されたものであり、その奥付に記された発行部数は5,500部とメキシコ版の約2倍であることを指摘する。そして駄目押しとして、その手元にある一冊に著者から寄せられた、「失敗した革命の物語」を「勝利した革命より」捧げるという献辞の文面を紹介してみせる。

自身でも出版業に従事し、またキューバとの直接的なパイプを持つラマならではのデータの提示を受け、ロドリゲス・モネガルも応酬した。『エル・パイース』(1964年6月8日)に発表された記事「実に不都合な本」で、『マルチャ』への応答としてアンヘル・ラマの固有名を徹底して避けるロドリゲス・モネガルは、キューバ国内で『光の世紀』が売れていないというのはキューバ人から聞いた話であること、自分が披露したのは完全に個人的な読解であり、出来合いの「正統的」読解、「当たり前のこと」以上のことを言うのが批評家なのだと主張し、論争相手の相変わらずぶりにはあくびで答えるのみだ、と締める。これに応える記事「知的服従」(『マルチャ』第1209号)でラマは、中心的論題から逃げる「相変わらずの」ロドリゲス・モネガルに対し、「個人的意見」で全てを正当化しようという論争相手の知的軽薄さ、知的服従ぶりを批判したのち、先に述べた見解と事実を改めて列挙する。対するロドリゲス・モネガルの記事「検閲官から死刑執行人へ」(『エル・パイース』1964年6月14日)は、もはや『光の世紀』の論評から離れ、このマッカーシズムは昔からの数々の因縁によるものだという悪罵に終始し、もう応答はしないと論争を打ち切る。これを受けたラマの記事「知的軽薄」(『マルチャ』第1210号)は、またも論争の要点から逃げる相手を「聞こえないふりを装う」と難詰しつつ、論争相手による別件での事実の歪曲事例を並べ、論点を改めて逐一繰り返したのち、これ以上の応答がない以上こちらもこれ以上は書かない、と締める。

論争というにはあまりに不幸なこの刺々しい悪罵の応酬は、双方の政治的態度を赤裸々に暴き出すのみならず、それぞれとも屈するわけにはいかない、水

面下で進行する文化的冷戦の現れでもあった。

文化自由会議の影とラマの奔走

『光の世紀』をめぐる両者の論争に先立つ 1963 年、文芸誌『ヌメロ（数）』（*Número*）第 2 期開始の報が、定期刊行物を賑わせていた。『ヌメロ』は 1949 年、ロドリゲス・モネガルが詩人イデア・ビラリーニョ、作家マヌエル・クラップスとともに創刊し、のちにベネデッティも編集陣に加わった文芸誌である。ロドリゲス・モネガルの審美眼が遺憾無く発揮されながらも、経済危機に伴う製作費高騰により 1955 年に休刊していたこの雑誌が、1963 年にアルファ社を母体として第 2 期をスタートさせたのである。『ヌメロ』周辺の動向をめぐり警戒を強めていたラマは⁷⁾『マルチャ』（第 1161 号）で、編集陣の顔ぶれに新味が欠けていると『ヌメロ』の新たな船出に水を差す。ともあれ創刊号の序言で宣言されたように、第 1 期よりもさらにスペイン語圏全体に目を向けることを目指した第 2 期『ヌメロ』は、ニカノール・パラやフアン・ロドルフォ・ウィルコック、アルフォンソ・レジェス、フエンテスらを取り上げ、やはりラテンアメリカ文学の紹介に力を入れると思われた。

だが第 2 期『ヌメロ』は、早々に座礁する。編集部が、反共主義文化人の提言団体である文化自由会議（Congress for Cultural Freedom, 1967 年に The International Association for Cultural Freedom へと改名）との連携をめぐり分裂劇を演じていたのである。のちにウゴ・アルファロが語るところによれば、『ムンド・ヌエボ』編集長のオファーを受けたロドリゲス・モネガルが、『ヌメロ』の編集長をベネデッティに譲ると持ちかけていた。さらにイデア・ビラリーニョによれば、アルファ社の社主であるベニト・ミジャ経由で、文化自由会議が『ヌメロ』への出資を持ちかけていた（Rocca 2015: 242）。キューバ革命に関してロドリゲス・モネガルと正反対の見解を持っていたのみならず、文化自由会議の背後に CIA の存在を疑っていた残りの編集陣はこれらの申し出を拒絶し、『ヌメロ』第 2 期はわずか 3 号で空中分解する。ロドリゲス・モネガルによる『光の世紀』書評の発表は、この決裂の渦中でのことだった⁸⁾。

ほどなくしてロドリゲス・モネガルは実際にパリに渡り、文芸誌『ムンド・ヌエボ（新世界）』（*Mundo Nuevo*, 1966-1971）の編集長に就任する。創刊号ではガルシア・マルケス『百年の孤独』の草稿を読んだというフエンテスへのインタビューを掲載し、第2号では『百年の孤独』の一部を先行掲載するなど、未知の作品であった『百年の孤独』の文学的価値を早々と定めながらも同時に「『百年の孤独』によって代表される作品の一群としてのラテンアメリカ文学」（藤井 2024: 174）という視座を提示した『ムンド・ヌエボ』は、23カ国にわたる販売網を備え、世界的なラテンアメリカ文学「ブーム」の演出に大きく貢献した。そしてこの雑誌においてもロドリゲス・モネガルは、『ヌメロ』の運命を辿るかのようになり、ラテンアメリカ国際関係協会（*Instituto Latinoamericano de Relaciones Internacionales*, ILARI）を隠れ蓑とした文化自由会議の資金援助、そしてその背後に控えるCIAの影響をめぐる疑惑によって、スキャンダルの渦中に置かれることになる。1966年に『ニューヨーク・タイムズ』が文化自由会議とCIAとの関係を暴露すると、ラマは『マルチャ』紙上で、『カサ・デ・ラス・アメリカス』編集長ロベルト・フェルナンデス・レタマールとロドリゲス・モネガルの公開書簡を掲載する（第1296号）など両論併記の姿勢をとりながらも、自らの記事（第1302号）ではスキャンダルを徹底追及するなど、『ムンド・ヌエボ』批判を直接的間接的に繰り広げた。数ヶ月後、『ムンド・ヌエボ』が『マルチャ』でまともに取り上げられないことに業を煮やしたロドリゲス・モネガルが抗議の投書を行うものの、その投書でロドリゲス・モネガルに虚仮にされた『マルチャ』寄稿者の名誉を守る形で主幹キハーノが抗議を一刀両断し（第1327号）、以降も『ムンド・ヌエボ』は『マルチャ』から排除され続けることになる⁹⁾。最終的に『ムンド・ヌエボ』は文化自由会議からの出資を認め、ロドリゲス・モネガルは誌上での釈明ののち編集長を辞する。

2022年に刊行されたラマの書簡集からは、この一連の記事の裏でのラマの奔走ぶりが窺える。カサ・デ・ラス・アメリカスのアイデエ・サンタマリアやフェルナンデス・レタマール、マルシア・レイセカらと緊密に連絡をとって互いに敵情を知らせつつ、たとえばベネデッティに対しその実情を知らせたり、メキシコの詩人トマス・セゴビアに対し、『ムンド・ヌエボ』編集部に加わる

のを思いとどまるよう説得を試みたりしている¹⁰⁾(Rama 2022: 201-228)。もちろんそのような党派活動を超え、自らが経営に携わるアルカ社からカルペンティエールの評論集(『ティエントと変奏』 *Tientos y diferencias*, 1967)やキューバ、ペルー、ベネズエラの短篇アンソロジー(『11人のキューバ作家ここに語る』 *Aquí once cubanos cuentan*, 1967; 『10のペルー短篇集』 *Diez cuentos peruanos*, 1968; 『ベネズエラここに語る』 *Aquí Venezuela cuenta*, 1968)を出すための努力も垣間見えるし、カサ・デ・ラス・アメリカの発行する文化誌『カサ・デ・ラス・アメリカス』をモンテビデオの書店で販売すべく、雑誌を送るよう繰り返し要請する姿も見られる¹¹⁾。のちに彼の批評の基軸をなすアルゲダスとの交流も、書簡集で窺い知ることができる。

『テーマス』の貢献

ラマの書簡からは、文化自由会議の影響力拡大に関する懸念が幾度も表明されている。そのウルグアイでの表れは、『ムンド・ヌエボ』に限らなかった。文化自由会議の資金援助を受けた雑誌が、ほかならぬモンテビデオで創刊されたのである。それが、冒頭にも述べた文化誌『テーマス』であった。

『テーマス』編集長のベニト・ミジャは、スペイン・アリカンテに生まれ、パリに亡命したのちブエノスアイレスを経てモンテビデオに移り住んだ編集者である。それぞれの地で雑誌の編集経験を持つ彼は、自らの経営する書店アルファを母体に1958年、同名の出版社アルファ社を立ち上げていた。このアルファ社と組んでラマは叢書「今日の文学」(*Letras de Hoy*)など重要な仕事をする¹²⁾が、先述のとおりアルファ社が『ヌメロ』第2期の出版母体となったことで、ラマはミジャと決別する。そしてそのアルファ社からミジャは、まさにILARIの付属機関であるウルグアイ文化促進センター(*Centro Uruguayo de Promoción Cultural*)の機関誌として、『テーマス』を創刊するのである(Janello 2019)。

バルセロナのセイス・バルル社の書籍のウルグアイにおける流通・販売を引き受け、『ムンド・ヌエボ』とも良好な関係を持つ『テーマス』——そのスタイ

リッシュな誌面デザインは、のちに『ムンド・ヌエボ』にも受け継がれたという (Janello 2019) —— は、創刊号巻頭言に見られるように、イデオロギーや党派性を超えた南米知識人同士の対話と討議の場であることを目指した。各方面の作家・知識人と交友を持つミジャの手腕により『テーマス』は、ウンベルト・エーコ、スーザン・ソントグ、ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー、コスタス・アクセロス、アラン・ロブ＝グリエといった欧米の作家・批評家・思想家を紹介しつつ、ラテンアメリカレベルではレオポルド・セアやフリオ・オルテガのような思想家・批評家、当時まだブラジル国外では無名に近かったジョアン・ギマランイス・ローザをも取り上げた。第2号で紹介されたこのギマランイス・ローザをめぐり、同号ではロドリゲス・モネガルの作家論も掲載されており、ウルグアイでの居場所を失った彼に執筆機会を与えることで、言論や芸術的視点の多様化、戦闘的ではない対話の場を提供しようとする『テーマス』の姿勢が窺える。スペイン語圏の文学者では、オクタビオ・パスやロア・バストスの論考を掲載するのみならず、アレハンドラ・ピサルニークのような新鋭詩人を紹介し、そして当然と言うべきか、バルガス・ジョサ『緑の家』先行掲載 (第5号) や、『百年の孤独』を論じたルベン・コテロの「ガルシア・マルケスと近親相姦の禁止の主題」 (第13号) など、ブームの中核をなす作家についても確実に取り上げている。文化自由会議とCIAの関係が暴露されてのちミジャが嫌気から1967年にカラカスに移り、わずか3年間の活動に終わった『テーマス』だが、ウルグアイにおけるラテンアメリカ文学受容において果たした貢献は大きい。

ネルーダとオネッティ：国際ペンクラブ会議をめぐって

上に述べた文化自由会議のスキャンダルは、いわゆる西側からの干渉の例である。とはいえこの文化的冷戦において、キューバ側からの干渉も無縁ではなかった。1966年6月にニューヨークで行われた第36回国際ペンクラブの会議に出席し、その帰途でペルーに立ち寄りベラウンデ・テリー大統領から表彰を受けたパブロ・ネルーダに対し、キューバ知識人たちが連名の公開書簡を発表

した、いわゆるネルーダ事件がそれである。フェルナンデス・レタマールはもちろんのこと、カルペンティエールやニコラス・ギジェンらも署名したこの公開書簡は、ネルーダのような人物が当会議に出席することの政治的効果を問題視し、米帝国主義の誘惑に屈したとネルーダを非難したのだった。

当初は『カサ・デ・ラス・アメリカス』（第38号）に掲載されたこの公開書簡を、『マルチャ』（第1315号）はすぐさま全文掲載し、同時に、自分の発言が報道において歪曲されていると指摘しつつ表現の自由を強調するネルーダの自己弁護を要約したハンス・エールマンの記事も同じ紙面で紹介した。続く第1316号でもネルーダ自身のキューバ知識人への返答とそれに対するキューバ側の返答が併記され、読者にその判断を委ねる形になっている。キューバ革命政権の硬直化のみならず「ラテンアメリカ知識人の最初の大分裂」（Mudrovic 2010: 69）を感じさせる事件に際しても、『マルチャ』は『ムンド・ヌエボ』のスカンダル時と変わらず両論併記の態度を貫き、冷静を保とうと務めている。

他方、同じ国際ペンクラブ会議に出席していたのが、政治へのアパシーを貫き通すウルグアイのフアン・カルロス・オネッティだった。ブームの主演たちからひと世代もふた世代も離れた彼が1960年代、やはりこのブームに巻き込まれる形で脚光を浴びるようになったのだった。先行する1950年代に国内の文学市場が成長したことも相まって、彼の著作は従来のようにブエノスアイレスの版元ではなく、1960年前後に創業されたウルグアイの新興出版社から、続々と刊行されるようになる。アシール社（創業1952年、1960年に協同会社として再編）からは1962年に短篇集『かくも恐ろしき地獄』、バンダ・オリエンタル出版（創業1961年）からは1965年に中短篇集『ハコブともう一人 ある叶えられた夢 その他の短篇』が刊行される。マルチャ出版は1959年に刊行した中篇『名もなき墓』を、『名もなき墓のために』と改題して1967年に刊行する。中でもアルファ社は1960年に中篇『不幸の顔』、1963年に中篇『彼女と同じ悲しみを』、1964年に長篇『屍集めのフンタ』を刊行し、オネッティの新作をウルグアイで刊行する重要な窓口となる。1966年はその『屍集めのフンタ』が再販された年でもあり、名実ともにラテンアメリカ文学を代表する作家

の一人としてニューヨークに赴き、作家たちと交流することとなったのである¹³⁾。

とはいえ際立つのは、ブームに対する彼の距離感にほかならない。すでに1962年、日刊紙『アクション（行動）』（*Acción*）の6月23日版で彼は、カルロス・ガルデルのブームを語る記事において、「エミール・ロドリゲス・モネガは、彼の敵対者によれば、ラテンアメリカ文学のブームを作り出した」（Onetti 2009a: 489）とブームに冷ややかな視線を向けていたのだった。国際ペンクラブ会議を体験したのちも、その距離感是不変である。やはり『アクション』（11月13日版）に発表された「文学的考察」では、ブームの作家の名前を列挙して昨今評判の「ラテンアメリカ小説の復活」に触れながらも、ジョイスを引き合いに出しながら、必然性のない新しい形式の探究は小説の未来への信念を冷え込ませるだけだと述べる。その冷めた態度は、小説は芸術という遊戯のうちで最も重要で豊かな表現形式なのだという彼の信念と表裏一体であり、そっけない書きぶりの行間から我が道を行く作家の相貌を窺わせる。

栄光への上昇のアシスト——ガルシア・マルケスと『マルチャ』

このような不和や無関心をも巻き込みつつ形成されていった「ラテンアメリカ文学」とは、差異を多分に孕んだひとつの企図にほかならない。そしてこの企図としてのラテンアメリカ像を完成させることになるのが、ガブリエル・ガルシア・マルケスであり、『百年の孤独』であった。

『百年の孤独』が多様きわまるラテンアメリカを映し出す「ラテンアメリカ文学」の金字塔となった要因としては、内容面もさることながら、それを取り巻く多種多様なアクターの活動に着目する必要がある。アルバロ・サンタナ＝アクーニャ『栄光への上昇——「百年の孤独」はいかにして書かれ、グローバルな古典となったか』（2020）が明瞭に描き出したように、『百年の孤独』の執筆と宣伝にあたっては、米欧両州にまたがる、コスモポリタンかつラテンアメリカの芸術家・批評家が織りなすネットワークが大きく作用した。そのネットワークに、ウルグアイもまた重要な役割を果たしたのである。

ガルシア・マルケスが『マルチャ』において初めて言及されたのは 1961 年最終号（第 1090 号）別冊，現代コロンビア小説における暴力の主題をめぐる，チリの批評家リカルド・ラッチャムの論考である。ラッチャムはここで，同年刊行されたばかりの中篇『大佐に手紙は来ない』を取り上げ，すでに刊行されていたデビュー作『落葉』（1955）——ラッチャムはこの中の一篇「マコンドに降る雨を見たイサベルの独白」を，自身の編んだ『イスパノアメリカ短篇アンソロジー』（1958）に加えている——をも踏まえつつ紹介している。ガルシア・マルケスに関するきわめて早い批評的反応もさることながら，ここで特筆すべきは，ラッチャムにとってガルシア・マルケスが，傑出した「コロンビアの作家」である点である。コロンビア文学をめぐる論考とはいえ，そこでは広域レベルでの美的達成は考えられていない。

周囲の仲間の成功を尻目に焦っていたガルシア・マルケスに栄光をアシストしたのは，やはりアンヘル・ラマだった。1964 年にメキシコでガルシア・マルケスと出会ったラマは，まだ大陸レベルでの作品の流通に恵まれていなかったその作品をプロモートすることで合意する。まさしくその年のうちに『マルチャ』第 1193 号で二つの短篇（いずれも『悪い時』の一部）を紹介し，続けて第 1201 号の論考「ガルシア・マルケス アメリカ大陸の暴力」では 2 ページを割いて，その「夢想的リアリズム」（“realismo alucinado”）が「この大陸の新しい芸術的表現」を達成した，とコロンビアを超えたレベルで作家を称揚する。のみならず翌 1965 年には，アルカ社より作家の処女作『落葉』の新版を刊行してみせる。この『落葉』はベネデッティにより日刊紙『ラ・マニャナ（朝）』（*La Mañana*, 1965 年 11 月 5 日）で書評され，ここでガルシア・マルケスはいかに「現代ラテンアメリカ文学の数ある名前の一つ」と呼ばれることになる（Santana-Acuña 2020: 118）。

そうした紹介の果てに 1967 年，『プリメーラ・プラナ』（*Primera Plana*）や『アマウタ』（*Amauta*），そして『ムンド・ヌエボ』といった国外の有力雑誌と並ぶ形で，『マルチャ』は『百年の孤独』抜粋の先行掲載（第 1351 号）を果たし，ブエノスアイレスのスタメリカナ社より『百年の孤独』が刊行された際にはラマ自身の作品紹介も発表する（第 1368 号）など，サンタナ＝アクーニャの

言う「ガルシア・マルケスのネットワーク」(2020: 123)に深く食い込むことになるのである¹⁴⁾。さらに同じ号ではまだ『夜のみだらな鳥』(1970)を発表する前のホセ・ドノソをめぐって作家メルセデス・レインが長い論考を寄せており、ラテンアメリカ文学に付け加わるべき新たなピースを予告するかのような趣がある。

おわりに

1968年、ますます多忙を極めるラマは健康上の理由から『マルチャ』文芸欄編集長を辞任し、翌年にはプエルトリコに移る。後任のホルヘ・ルフィネリも精力的な活動を行い、論争こそ活発になっていたものの、『マルチャ』発のものは乏しい。また、カウンターカルチャーの興隆に伴い、文芸欄自体がプレゼンスを低下させていったという点も看過できない¹⁵⁾。

ブームに決定的な亀裂を入れたのは、言うまでもなく1971年のパディージャ事件だった。革命を揶揄するような詩を発表した詩人エベルト・パディージャがキューバ当局により自己批判を強いられたこの事件をめぐって、『マルチャ』の別冊『クアデルノス・デ・マルチャ』(Cuadernos de Marcha)第49号は特集を組み、いつものように関連文書を一挙掲載しつつ両論併記の形でバルガス・ジョサやベネデッティ、コルタサルの論考を載せた。すでにプエルトリコに移っていたラマも論考「新たな文化政策」を寄稿したものの、革命政権を擁護する「ウルグアイ知識人及び芸術家の宣言」の末尾にその名前はなく、同年には『カサ・デ・ラス・アメリカス』協力委員会も辞任する。1973年のクーデター後、『マルチャ』主催の文学賞においてネルソン・マラの短篇「ボディーガード」が軍事文民政権の不興を買い、審査員のルフィネリ、レイン、オネッティが投獄され、翌年に『マルチャ』は廃刊の憂き目に遭う。一つの時代が確実に終わった。

1960年代のウルグアイにおけるラテンアメリカ文学の受容は、国際政治の磁場に大きく翻弄された。国の規模やその国際的地位、天然資源といった観点からは、不自然に思えるほどである。とはいえそのアクターの多くは、二極化

する社会の中で芸術的価値のある作品をプロモートすべく奔走し、『マルチャ』がガルシア・マルケスのプロモートにおいて体現したように、世界的作家の誕生に寄与することにもなった。アメリカ大陸に背を向けてきたウルグアイが受け取ったラテンアメリカ文学は、「ラテンアメリカ文学」として確かに世界に送り返されたのである。

注記：本稿は、ラテンアメリカ学会第45回定期大会（於：慶應義塾大学日吉キャンパス）のパネル『『ラテンアメリカ文学のブーム』の舞台裏——出版社、新聞・雑誌、文学賞と小説文学をめぐるネットワーク』にて筆者が行った報告に基づくものである。本稿の執筆に際しては、大幅な加筆修正を行った。

- 1) スペイン語の単語 *América* は、南北アメリカ大陸およびカリブ地域をも包含する。この語に対し日本語で「アメリカ大陸」の訳語を与えたとき、カリブ地域が閑却されているような印象を与えるのは否めない。しかしながら、例えばこの時期のスペイン語で「大陸の」*continental* などという形容詞が用いられるとき、そこで想定されているのはキューバをはじめとしたカリブ諸国をも含めた一つの地域である。また、「アメリカ地域」という耳慣れない訳語、あるいは「米州」というアメリカ合衆国の強い存在感が含意される訳語も、この語の含み持つニュアンスにとって好ましいものではない。ゆえに本稿では、*América* に「アメリカ大陸」の訳語を当て、そこには南北アメリカ大陸およびカリブ地域が含まれるものとする。
- 2) イデア・ビラリーニョによれば、ラマとベネデッティの不仲は、1948年に彼らが携わっていた文芸誌『クリナメン』（*Clinamen*, 1947-1948）の分裂に端を発する（Rocca 1992: 140）。
- 3) ラマにせよロドリゲス・モネガルにせよ、1960年前後においてそのラテンアメリカ文学に対する知識は偏頗の誹りを免れ得なかった。ラテンアメリカ文学における「知的」「大衆的」「先住民的」の三層のうち、両者に馴染み深かったのは「知的」の層のみであり、後ろの二つの層に関する不案内ぶりは当時までの批評において顕著である（Rocca 2003: 324-329）。
- 4) とあるラジオ番組で「ボルヘスとネルーダにおける逃避と根を張ることの問題」をめぐる公開討論に招かれたラマとロドリゲス・モネガルは、自分たちの対立が和解不可能であることを認めている（Gilman 2012: 389）。

- 5) ラマが『マルチャ』に発表した『マルティン・フィエロ』論をめぐるロドリゲス・モネガルの皮肉な論評、『クリナメン』の編集にロドリゲス・モネガルが加入することへのラマの反発（およびその結果としての『クリナメン』終刊）、ラマの小説『おお清教徒の影！』（1950）に寄せたロドリゲス・モネガルの悪意の書評など、20代の頃からの両者の衝突は数知れない。
- 6) 大きな論争を巻き起こしたこの書評は、現在必ずしも広く知られているものではない。共和国大学名誉教授のリサ・ブロック・デ・ベアルらが中心となって立ち上げたロドリゲス・モネガルの業績を記録したサイト（http://www.autoresdeluruguay uy/biblioteca/emir_rodriguez_monegal/index_02.html）には、彼が『エル・バイース』に寄稿した記事の浩瀚なリスト（http://www.autoresdeluruguay uy/biblioteca/emir_rodriguez_monegal/bibliografia/prensa/indelpais.htm）が存在するが、本節で述べるロドリゲス・モネガルの3本の記事についての情報は、リストには一切記載されていない。
- 7) パブロ・ロッカによれば、この時期のラマはアルゼンチンのダビド・ビニャスに宛てた書簡で、アルゼンチンとウルグアイの2カ国協働による文芸誌の創刊を持ちかけており、ビニャスは返信において興味を示しつつも、体勢が整わないことを理由に固辞している（Rocca 2012: 30-32）。
- 8) イデア・ビラリーニョによれば、1964年6月9日に『ヌメロ』の会議が開かれ、廃刊が決定していた（Rocca 2015: 243）。
- 9) 『ムンド・ヌエボ』に関しては、ムドロフチッチ（1997: 2010: 53-75）およびモレホン・アルナイス（2015）が詳しい。『百年の孤独』との関わりについては、藤井（2024: 173-181）および寺尾（2024: 260）でも言及がある。
- 10) ラマは書簡において、この『ムンド・ヌエボ』包囲網への呼びかけがロドリゲス・モネガルへの個人的な感情からではなくイデオロギー的なものであることを幾度も強調している。またラマは、ロドリゲス・モネガルは黒幕ではなく、裏で糸を操っているのが誰なのかはロドリゲス・モネガル自身も気づいていないのだとも述べている。書簡という媒体におけるこのような態度表明がラマなりの真摯さの表れであることは、文化自由会議の影響それ自体への度重なる懸念への表明からも読み取れよう。
- 11) もっともラマは、送ったはずの書籍の受領連絡がまったく来ないという事態の頻発を前に、アイデエ・サンタマリアに対し「キューバはこちらを上回ってくる」「Cuba me supera」との慨嘆を漏らしてもいる（1964年5月11日付）。
- 12) アルファ社におけるラマの仕事については、浜田（2024）を参照。
- 13) 例えばカルロス・フエンテスはコルタサル宛て書簡（1966年7月31日、パリ）で、PENクラブ会議の席上で初めて知り合うことになったオネッティについてこ

のように述べている。「オネッティには人としてのものすごく魅了されました。いま再読中ですが、楽しさもひとしおです。何とまあ、バロック的であると同時に秘密めいていることか」(Cortázar, Fuentes, García Márquez y Vargas Llosa 2023: 154)。

- 14) 『エクセルシオール』紙(2017年5月16日)の記事が伝えるアルゼンチン人編集者グロリア・ロドリゲスの回想によれば、スタメリカナ社のフランシスコ・ポルアがガルシア・マルケスに手紙でコンタクトを取った際、すでにラマとの間でアルカ社から『百年の孤独』を刊行する合意があったという。しかしその返信においてガルシア・マルケスは、スタメリカナに秋波を送りつつ契約にはまだ至っていないと述べ、最終的に彼は合意を破棄する形でスタメリカナ社に原稿を送ることになる。ただし、合意を反故にされたのはメキシコのエラ社であるという記述もあり(Santana-Acuña 2020: 68)、真相は不明である。
- 15) 例えばカウンターカルチャーを大々的にフィーチャーした『ロス・ウエボス・デル・プラタ(ラ・プラタの卵たち)』(*Los huevos del Plata*, 1965-1969)のような雑誌は、『マルチャ』執筆者たちを「年寄り」とみなし、ラテンアメリカではなく世界中の若者の動向と同調した(Markarian 2016: 107-109)。

参考文献

Número (1ª. y 2ª. épocas)

Marcha

El País (Uruguay)

Temas

“50 años Cien años de soledad; logró la cima sin publicidad”. En *Excelsior*, 26 de mayo de 2017.

<https://www.excelsior.com.mx/expresiones/2017/05/26/1165817> (最終アクセス: 2024年5月20日)

Benedetti, Mario. *El país de la cola de paja*. Montevideo: Alfa, 1960.

Cortázar, Julio, Carlos Fuentes, Gabriel García Márquez y Mario Vargas Llosa. *Las cartas del boom*. Edición de Carlos Aguirre, Gerald Martin, Javier Munguía y Augusto Wong Campos. Madrid: Alfaguara, 2023.

Gilman, Claudia. *Entre la pluma y el fusil. Debates y dilemas del escritor revolucionario en América Latina*. Nueva edición ampliada. Buenos Aires: Siglo XXI, 2012.

Gómez, Facundo. “Ángel Rama y el descubrimiento de la literatura latinoamericana en las páginas de *Marcha*”. VI Congreso Internacional de Letras: Transformaciones culturales. Debates de la teoría, la crítica y la lingüística, 2014.

<http://eventosacademicos.filo.uba.ar/index.php/CIL/VI-2014/paper/viewFile/2101/917> (最終アクセス: 2024年5月20日)

- Jannello, Karina. "Montevideo en la Guerra Fría cultural. La revista *Temas* de editorial Alfa". En *AMÉRICALEE. El portal de publicaciones latinoamericanas del siglo XX*, 2019.
https://americalee.cedinci.org/wp-content/uploads/2019/07/TEMAS_ESTUDIO.pdf (最終アクセス：2024年5月20日)
- Maggi, Carlos. "Sociedad y literatura en el presente. El 'boom' editorial". En *Capítulo oriental*, núm. 3, 1968, pp. 33-41.
- Markarian, Vania. *Uruguay, 1968. Student Activism from Global Counterculture to Molotov Cocktails*. Berkeley: University of California Press, 2016.
- Morejón Arnaiz, Idalia. *Política y polémica en América Latina. Las revistas Casa de las Américas y Mundo Nuevo*. Leiden: Almenara, 2015.
- Mudrovic, María Eugenia. *Mundo Nuevo. Cultura y guerra fría en la década del 60*. Rosario: Beatriz Viterbo, 1997.
- . *Nombres en litigio. Las guerras culturales en América Latina: del happening desarrollista a la posguerra fría*. Rosario: Beatriz Viterbo, 2010.
- Onetti, Juan Carlos. "Y pensar que hace diez años..." En *Obras completas*, tomo 3, edición de Hortensia Campanella, Barcelona: Galaxia Gutenberg, 2009a, pp. 489-491.
- . "Reflexiones literarias". En *Obras completas*, tomo 3, 2009b, pp. 518-521.
- Rama, Ángel. *Una vida en cartas. Correspondencia 1944-1983*. Edición de Amparo Rama. Montevideo: Estuario, 2022.
- Rocca, Pablo. Rocca, Pablo. *35 años en Marcha. Crítica literaria en Marcha y en el Uruguay 1939-1974*. Montevideo: División Cultural de la Intendencia Municipal de Montevideo, 1992.
- . "La idea de América Latina y de su historia literaria. Las visiones de Rodríguez Monegal y de Ángel Rama en *Marcha*". En Mabel Moraña y Horacio Machín (eds.), *Marcha y América Latina*, Pittsburgh: Biblioteca de América, 2003, pp. 313-347.
- . "Dialéctica de la revolución: notas sobre una polémica entre Ángel Rama y Emir Rodríguez Monegal, 1964, a propósito de *El Siglo de las Luces* de Alejo Carpentier". *Cuadernos del CILHA*, año 6, núm. 6, 2004, pp. 111-124.
<https://anaforas.fic.edu.uy/jspui/handle/123456789/36831> (最終アクセス：2024年5月20日)
- . (ed.) *Revistas culturales del Río del Plata. Diálogos y tensiones (1945-1960)*. Montevideo: Departamento de Publicaciones de la Universidad de la República, 2012.
- . *35 años en marcha. Mapa de la escritura en el semanario Marcha, 1939-1974*. La Habana: Fondo Editorial Casa de Las Américas, 2015.
- Rodríguez Monegal, Emir. *Narradores de esta América*. Montevideo: Alfa, 1961.
- Santana-Acuña, Álvaro. *Ascent to Glory. How One Hundred Years of Solitude Was Written and*

Became a Global Classic. Nueva York: Columbia University Press, 2020.

寺尾隆吉「スタメリカナ社の出版戦略とラテンアメリカ文学のブーム——『石蹴り遊び』と『百年の孤独』の刊行」寺尾隆吉編著『ラテンアメリカ文学の出版文化史 作家・出版社・文芸雑誌と国際的文学ネットワーク』勉誠社, 2024 年, 227-274 ページ。

浜田和範「フェリスベルト・エルナンデス作品の受容に見るウルグアイ出版産業の展開」寺尾編著『ラテンアメリカ文学の出版文化史』勉誠社, 2024 年, 93-119 ページ。

藤井健太朗「コスモポリタンなラテンアメリカ文学と文芸誌・出版社——カルロス・フエンテス, 『レピスタ・メヒカーナ・デ・リテラトゥーラ』, ホアキン・モルティス社, 『ムンド・ヌエボ』」寺尾編著『ラテンアメリカ文学の出版文化史』, 2024 年, 159-187 ページ。